

中心部震災メモリアル拠点の構成要素について

第5回検討委員会の論点は以下のとおりであり、議論を踏まえ、今後、事務局が拠点の具体像に関するケーススタディ調査を実施する予定。

【論点】

- (1) 役割 (多様な経験の共有・蓄積・発信 / 新たな知恵の創造と社会への実装 / 超長期の記憶の継承 / 広域的な連携) を果たすために、以下の要素がどのように機能するのか
 (2) どの役割・要素に力点を置くべきか

拠点の要素 (これまでの検討委員会が出た意見から抽出)

- ①空間：学び合い、語り、伝え合う空間。日常空間として人が集いつつ、特別な日には厳粛な空気に包まれる空間
 - ②施設：訪れる人の出発点として、様々な施設とつながり、様々な場所のことを伝えられる施設。災害とともに生きるには何が必要かを提示・発信する施設
 - ③展示：時代や期間に応じたキュレーションで変わり続ける展示
 - ④広場：広場のように開かれた場
- ⑤象徴的存在：象徴的な存在を通じて想像を超える事があることを伝える
 - ⑥モニュメント：追悼のシンボル。その由来を通じて震災の記憶を親から子に継承するモニュメント
 - ⑦音：震災が起きた時間を音で伝えるなど、反復的な音による記憶の継承
 - ⑧行事：災害をきっかけに生まれ、100年以上先にも経験をつなぐような行事
 - ⑨歌：市民全員が歌えるようなもの
- ⑩メディア：現実の情報を公平に発信する独立したメディア
- ⑪アーカイブ：多様な主体が関わるアーカイブ。複雑さを保つアーカイブ
- ⑫フューチャーセンター：地域課題解決の拠点
- ⑬人材：意見を集め、深め、貯え、手を加え、広げるなど、持続的に動く人材。多様な主体と協調し、それらをうまく組み合わせられる人材
 - ⑭組織：市民や各機関をはじめとする社会全体がアクセスする受け皿となる組織
- ⑮財源：100年先を見通した安定財源。様々な主体が関わりお金を出し合う財源

なお、現段階で事務局が想定している検討委員会報告書の構成案は次のとおりであり、以降の検討委員会で順次議論していく予定。

0 序文

1 拠点の基本的方向性

2 背景

- (1) 震災復興メモリアル事業のこれまでの取組み
- (2) 東日本大震災という経験の意味合い

- ① どのような出来事で
 - a) 歴史的規模の災害
 - b) 広域複合災害
- ② どのような経験があったのか
 - a) 1つに括ることができない多様な経験
 - b) 社会のあり方を問われた経験
 - c) 記憶や経験をつなぐことの困難さと重要性を認識した経験

- (3) 仙台の中心部で展開する意味合い

- ① 仙台の特質とは何か
 - a) 東北の拠点・ハブ
 - b) 市民力のまち
 - c) 繰り返してきた災害の歴史
 - d) 防災環境都市・仙台
- ② 中心部の場所性とは何か
 - a) 多様な被災現場を持つ仙台の中心地
 - b) 東北のハブである仙台の玄関口

3 拠点の役割

- (1) 多様な経験の共有・蓄積・発信
- (2) 新たな知恵の創造と社会への実装
- (3) 超長期の記憶の継承
- (4) 広域的な連携

4 役割を発揮するための必須事項

- (1) 多様な主体の参画
- (2) 開かれた存在であること
- (3) 人材に力点を置いた展開

5 拠点の具体像（ケーススタディ）

※規模感・各機能の連携パターン案

- (1) パターン1
 - ① 全体像
 - ② 各機能の具体像
 - a) 機能 a
 - b) 機能 b
 - c) 機能 c
 - ③ 評価（メリット・デメリットなど）
- (2) パターン2
 - ・
 - ・
 - ・

6 拠点の具体化に向けて

- (1) 要件
- (2) 留意事項

7 検討経過